

まちかど・ズーム IN!

手話を通じて
ふれあいの輪



第15回「手話劇」



障害を持つ人と高校生などのボランティアがともに舞台をつくる恒例の手話劇「白石しらゆり会手話サークル主催」が7月1日、中央公民館で開かれました。

今回は、中国の兄弟の愛情にまつわる話を題材にした手話劇「七夕物語」が演じられたほか、障害者施設の入所者が歌や和太鼓などを披露しました。障害を越え、ともにくみ生きることの素晴らしさを呼びかけた出演者たちに、会場から温かい拍手が送られました。

半年がかりの力作

手作り甲冑(かっちゅう)を寄贈



春まつりに段ボールで作った甲冑を着用して武者行列に参加している「甲冑工房片倉塾」の塾生たちが、6月27日に市役所を訪れ、半年かけて作った段ボール製の甲冑1領を市へ寄贈しました。

この日寄贈された甲冑は重さ約5kgの成人用。段ボールを重ね合わせてパテで固め、その上に水性塗料を塗って仕上げた精巧なもので、本物と見間違えるほど立派なものとなっています。この甲冑は市役所の正面玄関に展示されていますので、ぜひご覧ください。

片倉塾は平成11年7月に設立、これまでに約60領の甲冑を作り、交通安全運動などでも活躍しています。

ごみを捨てないで

西保育園児が看板で呼び掛け



西保育園の5歳児17名が6月22日、白石川緑地公園内に環境美化を訴える看板を設置しました。

設置した看板は子供たちの手作り、約20センチ四方の板に「ごみを捨てないで」などのメッセージと空き缶などの絵を描いたものです。この日は、保育参観に来ていた父母などと一緒に30個の看板を設置しました。

西保育園では週1～2回、緑地公園を散歩しながら、ごみ拾いを続けています。

大雨・洪水に備えて

白石市水防訓練



集中豪雨や台風などによる水害から、住民の尊い生命と財産を守るための「水防訓練」が7月15日、郡山字西堀地内の白石川右岸堤防で行われました。

参加したのは、白石市水防団員(消防団員)、白石消防署員、宮城県大河原土木事務所職員など約200名。訓練では、堤防の透水防止のための「シート張り工法」や、越水防止のための「積み土のう工法」など5種目が水防団により実施されました。

国際交流に貢献

カロラインさん、ステファニーさんに感謝状

国際交流員として3年間、市役所総務課に勤務したカロライン・ケネディさんと、外国語指導助手として2年間、教育委員会に勤務したステファニー・ヴェチアーニさんに7月16日、白石市の国際交流の進展に寄与されたとして、市から感謝状が贈られました。

カロラインさんは姉妹都市交流やあしたば白石などでの語学指導に、ステファニーさんは中学校などで英語指導に当たっていました。母国での活躍をお祈りいたします。



みなさんからの素敵な情報を待ってます!

ごみ問題を考える

生き方変えようオトコの講座



男性にも家庭生活に身近な「ごみ問題」に関心を持ってもらおうと、ごみ処理場の見学会が6月21日に開かれ、約30名の市民が参加しました。

これは、女性政策室が男性を対象に月1回開いている「生き方変えようオトコの講座」の一環として行われたもので、参加者は白石衛生センター第二事業所と仙南リサイクルセンターを見学。施設職員から、ごみの搬入量や処理状況などの説明を受け、「ごみの減量化と分別排出に努めなければ」と話していました。

釣り場環境を快適に

白石川クリーン作戦



快適な釣り場環境と、めだかの学校など夏休みに開かれるイベントをきれいな白石川で行ってもらうと、6月24日の早朝、白石川漁業協同組合白石支部が「白石川クリーン作戦」を行いました。

参加したのは漁協組合員のほか市内の釣り愛好家など約30名で、緑地公園周辺の白石川河川敷などを約2時間かけて清掃しました。

戦中派、焼け跡派にとつて、八月といえは昭和二十年八月十五日、敗戦の日である。もはや記憶も定かでないが、蒸し暑い曇り空の日であったように思う。

その中に、私を大変かわいがってくれた長野県出身のKさんという大尉がいた。

十五日の夕方、



川井市長の
せせらぎトーク

母と子

K大尉は真つ青な顔で私の家に入ってくるなり庭で軍刀を振り回し、松の木をぶった切った後、ねじ曲がって鞘に収まらなくなった軍刀を片手に持ったまま、崩れ込むように座敷に横になつた。すごく酒臭かった。

毎年八月になると、常日頃の優しかった彼と敗戦の日の狂ったような姿がだぶって浮かんでくる。白石にいた部隊は九月には解散し、

それぞれのふるさとに戻っていった。何年か続いていたKさんからの年賀状も、もう途絶えてしまった。

七月に伊藤宗一郎先生の部屋を訪れたとき、靖国神社のカレンダーを拝見した。そこに載せられた文章は、あの頃の二十代の若者の典型的な思いを語っていた。ぜひ、皆さんに読んでいただきたい。

「林市造少尉は、昭和二十年四月十二日、神風特別攻撃隊第二七生隊隊員として爆装零戦に搭乗、鹿児島県鹿屋基地を出撃、与論島東方洋上にて戦死。敬虔なクリスチャンだった母の影響を受けて育った少尉は、『全てが神様の御手にあるのです。神様の下にある私達には、この世の生死は問題になりませんね。私は賛美歌を歌ひながら敵艦につっこみます』と、母への便りを遺して雲のかなたへ飛び立っていった。戦後、母まつるさんは、次の手記を某誌に寄せている。

『泰平の世なら市造は、嫁や子どもがあつて、穏やかな家庭の主人になつていたでしょう。けれども、国をあげて戦つたときに生まれ合わせたのが運命です。日本に生まれた以上、その母国が危うくなつた時、腕をこまねいて見ていることはできません。そのときは、やはり出られる者が出て防がねばなりません』また、『吾子は散りにき』と題して、次の歌も詠んでいる。

一億の人を救ふはこの道と

母をもおきて君は征きけり

母を置いて征つた林少尉の最後の便りは、『一足さきに天国に参ります。天国に入れてもらへますかしら。お母さん祈って下さい。お母さんが来られるところへ行かなくては、たまらないですから。お母さん。さよなら』だった。

人としての尊厳を保つために、最も必要なのは志の高さである。豊かさのみを追い求めたために、今、この国が失つた大きなもののひとつはこれだろう。中国の江沢民主席が国賓として来仙したとき書き残した句は、「登高望遠(高き二登りて、遠くヲ望ム)」であった。